

## vivo

7&amp;8

JULY/AUGUST  
2009

## CONTENTS

水戸室内管弦楽団第76回定期演奏会	1~2
高橋悠治の肖像	2~4
最近の公演から	4~5
ネットマ(最終回) & 編集長ごあいさつ	5
インフォメーション	6

水戸室内管弦楽団 第73回定期演奏会(2008年7月5日、6日)



## 準・メルクルとMCO —— 信頼のハーモニーで祝う、記念の年。

## ● 7/4(土)、5(日) 水戸室内管弦楽団第76回定期演奏会

本年4月に行われた水戸室内管弦楽団(以下MCO)第75回定期演奏会は、小澤征爾音楽顧問が2年半ぶりにMCOを指揮した、メンデルスゾーン生誕200年記念プログラムでした。〈ピアノ協奏曲第1番〉における小管 優の、大器の登場を鮮烈に実感させた独奏。そして豪華な独唱者、合唱、さらに語りに実力派の人気俳優・小澤征悦を迎えての〈夏の夜の夢〉。生誕200年を祝うにふさわしい充実した演奏会は絶賛の声に包まれ、同時に開催した千波湖畔での「大スクリーン・コンサート」も大成功でした(詳しくは4~5ページの演奏会レビューをご覧ください)。

MCO第75回定期演奏会は、「水戸芸術館開館20周年」「水戸市市制施行120周年」「水戸藩開藩400年」を記念する演奏会でもありました。最高の音楽で記念の年を祝う演奏会は、まだまだ続きます。それが、7月4日(土)および5日(日)に行われる、MCO第76回定期演奏会です。これに先立ち、7月3日(金)には茨城県武道館にて、水戸市内の小学5年生を対象にした「子どものための音楽会」が実施されます。また、7月6日(月)には今年から定期演奏会を行うことになった、栃木県足利市での館外公演も予定されています。(足利公演のお問い合わせ:足利市民会館 TEL 0284-41-2121)

## 準・メルクルとMCOの絆

MCO第76回定期演奏会の指揮を執るのは、これがMCOとの4度目の共演となる、準・メルクル。4度という回数は小澤征爾音楽顧問以外の指揮者では、若杉 弘と並ぶ最多回数です。しかも準・

メルクルは2004年6月の第57回定期演奏会が初共演ですので、以後2年に一度以上のペースで共演していることとなります。いかにMCOと準・メルクルが、近年急速に信頼の絆を深めつつあるかの証明でしょう。

指揮者とオーケストラの間に築かれるパートナーシップは、容易に説明できるものではなく、「当人同士だからこそ分かりあえる」要素が強いのですが、それでもあえて要因を探すとすれば、やはり「信頼」の一語につきるという気がいたします。精鋭がそろい、音楽への深い情熱を備えたMCOメンバーに対する、準・メルクルの篤い信頼。そして、真摯に音楽に向かい合う準・メルクルへの、MCOメンバーからの信頼。さらに、準・メルクルの目指す演奏のあり方が、MCOと絶妙に呼応しあっているように感じられます。すなわち、独自の解釈を著しく推し進めて「個性化」を図るのではなく、作品に内在する力を自然に引き出してゆく演奏。いわば「音楽自体に語らせる」演奏が、MCOの卓越したミュージシャンシップを存分に引き出し、結果として、消耗的な興奮よりも、充実した、深い音楽的感興を聴き手にもたらす…それが、準・メルクルとMCOが3度の共演を通じ熟成させてきた、味わい深い音楽の果実なのではないでしょうか。

それにしても近年の準・メルクルの活躍には、目を見張るものがあります。2005年からはフランスのリヨン国立管弦楽団の音楽監督に就任、ドビュッシー作品や細川俊夫作品のCDをナクソスから発表し高い評価を得る一方、2007年からはド

イツのライブツィヒのMDR交響楽団(旧・ライブツィヒ放送交響楽団)の音楽監督も務めています。オーケストラの世界にもグローバル化の波が押し寄せる昨今ですが、そんな中でもそれぞれ強く「フランス的」「ドイツ的」性格を有する対照的な2つの名門オーケストラのシェフを務めるというのは並大抵のことではありません。「vivo」2008年5-7月号のMCO73回定期演奏会紹介記事で、中村 晃主任学芸員が準・メルクルのことを「日本(東洋)と西洋という枠組みを超えた存在の一人」と紹介していますが、たしかに、柔軟な音楽性と共に、洋の東西や国による個性の違いを、俯瞰的に眺め、尊重できることが、このような壮挙を可能としているのかもしれない。グローバル化を超えた、新しい音楽文化の担い手としてのマエストロ、準・メルクルに、ますます期待が高まります。

## 期待のプログラム

さて、第76回定期演奏会のプログラムも、そんな準・メルクルの特色が、存分に発揮されるであろう内容です。ドビュッシー、ハイデン、ベートーヴェン。極めて「フランス的」な音楽と、「ドイツ的」な音楽、その双方をお楽しみいただけるというわけです。

まず、フランス近代の巨匠クロード・ドビュッシー(1862~1918)の〈こどもの領分〉。愛娘クロード=エマ(愛称シュシュ)のために書いたこのピアノ組曲は、〈雪が踊っている〉〈ゴリウォークのケーキウォーク〉といった魅力的な小品を含み、ドビュッ



左から：準・メルクル、豊嶋泰嗣

シーの優しくユーモラスな側面が伝わってきます。それにしても「この曲に管弦楽版があったらどうか？」と思われるかもしれませんが、管弦楽用に編曲したのはドビュッシーではなく、作曲家・指揮者のアンドレ・カブレ（1878～1925）。自身も〈赤死病の仮面〉〈イエスの鏡〉といったすぐれた作品を残したカブレですが、ドビュッシーに傾倒して師事し、師の作品の管弦楽化に協力しています（〈聖セバスティアンの殉教〉が有名）。〈こどもの領分〉の管弦楽化も1911年というドビュッシー存命中に果たされた、いわば「作者お墨付き」の仕事。聴きなれたピアノ曲がどんな装いをまとうか、これは聴きのがせません。なお、あらかじめ「予習」しておきたい、という方のために、準・メルクルがリヨン国立管弦楽団と録音していることをお伝えしておきましょう（ナクソス 8.570759）。

続いて、今年が没後200年にあたるヨーゼフ・ハイドン（1732～1809）の〈ヴァイオリン協奏曲 第1番 八長調 Hob.VIIa-1〉。ハイドンの協奏曲というと、2曲ある〈チェロ協奏曲〉や〈クラヴィーア（チェンバロやピアノなど、当時の鍵盤楽器の総称）協奏曲 二長調 Hob.XVIII-11〉、〈トランペット協奏曲 変ホ長調 Hob.VIIc-11〉などが有名です。それに比べ、3曲あるヴァイオリン協奏曲（〈第4番〉までであるが、〈第2番〉は消失）は必ずしも演奏機会に恵まれているとは言えません。これは、上記の

有名な協奏曲に比べ、3曲がみな1760年代というハイドンの若い時期の作品と推定されているためかもしれません。今回演奏される〈第1番〉の作曲年代は1761～65年と推定され、現存するハイドン作品の中でもかなり初期のものにあたります。円熟した古典派の筆致で書かれている1780年代以降の諸作に比べ、たしかにまだバロック協奏曲の名残が感じられる作品ではありますが。しかし、同時期に書かれた〈チェロ協奏曲 第1番 八長調 Hob.VIIb-1〉の若々しく力強い筆致を思い起こしていただければ、この曲が同様に「若きハイドン」の魅力をしっかり封じこめた作品であることがご想像いただけるでしょう。なおこの作品、1991年11月のMCO第8回定期演奏会でとり上げられており（ヴァイオリン独奏はMCOメンバー潮田益子）、久々の再演となります。今回の独奏者は、昨年のMCO第3回ヨーロッパ公演でコンサートマスターを務めた豊嶋泰嗣。小澤征爾音楽顧問の急病による出演キャンセルという非常事態を、みごと「指揮者なし」でのMCOの実力を欧州の聴衆に存分に伝えることによって乗り越えたのは、記憶に新しいところです。（第3回ヨーロッパ公演の様相については、音楽之友社より発売中の書籍『水戸室内管弦楽団と巡る ヨーロッパ音楽紀行』をご覧ください）

最後にルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

（1770～1827）の〈交響曲 第7番 イ長調 作品92〉。この曲についてはもはや何をかいわんや、でしょう。近年ベートーヴェンの交響曲の中でも人気急上昇中、マンガ（およびTVドラマ）『のだめカンタービレ』などでのブレイクにより、もしかしたら今一番日本で有名なベートーヴェンの交響曲かもしれないこの作品。そういうことを別しても「待ってました！」と快哉を叫んでいらっしゃる方は多いかもしれません。MCOのとりあげるベートーヴェンの交響曲としては、〈第2番〉〈第1番〉〈第8番〉〈第4番〉〈第6番“田園”〉に続く6曲目となります（そのうち〈第8番〉と〈第6番〉は準・メルクルによって「MCO初演」が果たされていることにご注目ください）。壮大な序奏に導かれ踊るような主部に突入する第1楽章、「不滅のアレグレット」と形容される第2楽章、ベートーヴェンの豪快な笑いが聴こえてくるような第3楽章、そして興奮と熱狂が支配する第4楽章…さまざまな記念年を祝うこの演奏会に、これほどふさわしい曲目も稀でしょう。準・メルクルとMCOは、その信頼のハーモニーによって、最近この曲にいろいろ付与されたマス・イメージをすっかり洗い流し、今はじめて聴くかのような新鮮な興奮と感動をもたらしてくれるに違いありません。ご期待下さい。チケットは残りわずか、お求めはお早めにどうぞ！《矢澤》

## 「今」の時代に、音楽の根源を見つめ、世界のあり様を模索する

### ●7/18(土) 高橋悠治の肖像

優れた芸術作品は、時代を映す鏡であると言われる。したがって、私達の生きる「今」という時代を知る上で、現代の作品に接することは大きな手がかりとなるのではないだろうか？—— そうした想いととも、水戸芸術館では、第二次世界大戦後に活動を行う作曲家たちの作品を特集する演奏会シリーズとして、2004年にルチアーノ・ベリオ、2007年にピエール・ブレーズを取り上げてきました。そしてこの演奏会シリーズの一環として、今日のわが国の作曲家の

中でもとりわけ大きな役割を果たしている高橋悠治（1938～）の創作の軌跡を辿る演奏会を、高橋悠治自身の企画・構成・出演により開催します。

#### 小澤征爾も驚嘆する才能

高橋悠治は、小澤征爾や潮田益子、安芸晶子など水戸室内管弦楽団の多くのメンバーと同様に、開設して間もない頃の桐朋学園に学んでいます。そんな旧知の仲でもある小澤征爾が高橋悠治のことを「日本も外国もひっくりかえして、悠

治ほどすぐれた才能をもっているやつも少ない。彼の能力はピエール・ブレーズ級だと思おう。」と評しています（小澤幹雄編：『対談と写真 小澤征爾』新潮文庫刊より）。さらに同じエッセイの中で、小澤は高橋の天才ぶりを次のようなエピソードを通じて紹介しています。1960年代のある時、小澤の指揮でトロント交響楽団がバーンスタインの〈不安の時代〉というピアノ協奏曲に類する形式の作品を取り上げた時に、ソリストのフィリップ・アントルモンが手首をけがして



高橋悠治 [え・柳生弦一郎]

出演不能になってしまいました。特別に難しい曲だし、あまり有名な曲でもないから、すぐに代役を見つけることができず、困り果てている時に、小澤は高橋悠治のことを思い出して、当時滞在していたニューヨークに電話したそうです。高橋は「そんな曲は今まで弾いたことも見たこともない」とのことでしたが「これからギリシャに1週間ほど行くが、いま楽譜が手に入ったら出来るかもしれない。暗譜は無理かも知れないが、まあOKだ」と演奏会2週間前の時点で返事をしたそうです。そして彼がギリシャでの何回かの演奏会を終え、ニューヨーク経由でトロントに入った時はほとんどギリギリだったのですが、オーケストラと合わせる段になったら、彼は楽譜を持ってきていませんでした。しかし練習が始まると、まるで悪魔のりうつたみたいに、バーンスタインのあくの強い難曲を、まるで5年も前から練習していたみたいに演奏したそうです。「暗譜は無理かも知れない」どころの話ではなく、小澤もオーケストラも本当に驚嘆したとのこと。その時の演奏会は満場総立ちの大成功で、終演後オーケストラのマネージャーが高橋のところに来て「来年また来てくれないか。どんな曲を弾きたいか。」と聞いたところ、彼は「オーケストラとやる協奏曲なんて興味がない。弾きたい曲なんてない」とぶっきら棒に返答したそうです。しかし、オーケストラがこの天才を放っておくわけがなく、その後、シェーンベルクやオーケストラの協奏曲やクセナキス作品のソリストとして彼を再度招き、ロンドン、ポストン、シカゴ、ニューヨーク公演を行うなどしています。さらに小澤は「世の中には悠治しか弾けない曲なんていうのがあるから、それこそ引っぱりダコで、クセナキス、ブーレーズ、メシアン、アメリカのガンサー・シュラーなどは悠治をとても貴重がって、いっしょに仕事をしている。」と60年代当時のことを語っています(前掲書)。

#### 新次元の模索～ヨーロッパ中心主義を超えて

このように、若き日の高橋悠治は、まずピアニストとして国際舞台で大きな注目を集めていました。(2007年には水戸芸術館でも『BACHのための4人・その1 — Bravery (勇気)』という

彼のピアノ・リサイタルを開催しているの、その演奏をお聴きになっている方も大勢いらっしゃるかと思います。)一方、彼が音楽活動の中心に考えているのは作曲でありました。彼は1963年以降、ベルリンやニューヨークを拠点に作曲・演奏活動を行ってきたのですが、72年に活動の本拠を日本に戻しています。彼はなぜヨーロッパやアメリカでの華々しい演奏活動を投げうって日本に戻ったのでしょうか?彼はなぜ、「オーケストラとやる協奏曲なんて興味がない。」と語ったのでしょうか?

実は、その根底にはこれまでに培われてきたヨーロッパ中心主義に対する彼の批判の眼がありました。近代音楽の主流はいうまでもなくヨーロッパにあり、過去2～3世紀の間にその音楽は世界中に広まりました。このことはヨーロッパが経済的、政治的、軍事的に進出していく過程と結びついた文明の侵略の一部だったと彼は語ります。しかし、1960年代以降に起こっているのは、このヨーロッパから一方的に打ちよせてきた近代化の大波に対するゆりかえしであり、ヨーロッパ文明自体の限界を批判すると同時に、いままで圧迫されてきた土地のものが新しく見直される過程でもあるとしています。そして、高橋悠治は自身が生まれ育った日本、そしてアジアの音楽や文化に眼を向けるのですが、この点に関して次のように語っています。「ヨーロッパ近代を批判するだけでなく、自分が無意識に身につけた日本的な伝統も批判し、両方から必要なものだけをとりだす作業は、せまい民族主義のワクのみではできない。日本とヨーロッパのことだけを知っていればよいのではなく、インドやアフリカや中国のことも知らなければならない。(以上の高橋悠治氏の言説は、平凡社刊『高橋悠治コレクション1970年代』の中の“音楽の学習のために”の項の要約ならびに引用です。)

高橋悠治の眼差しは、この世界のあらゆる音楽に向けられています。そして彼は作曲という行為を通じて、西洋・東洋という区分を超えた新しい次元に足を踏み入れるべく、探究と模索を行っているのです。

#### 高橋悠治の創作の軌跡

それでは、高橋悠治は、どのような音楽を作ろうとしてきているのでしょうか?今日までに為されてきた高橋悠治の実践は多岐にわたっていて、そのすべてをこの紙上で網羅することはできませんが、そのエッセンスをご紹介します。

1960年代初頭、高橋悠治はベルリンでクセナキスに師事しています。その師の影響などを受けながら、彼は、コンピュータを用い、確率論を応用した数理的な公式を組織して、作曲を行いました。この時彼が目指したのは、音楽を人間の手垢から切り離し、純粋な物の世界に音楽を解放することでした。それは、あたかも降り注ぐ雨だれの音のように、人間によって与えられた意味などは介在しない状態で、音響現象が繰り広げられる音楽でした。

1970年代後半に入ると、彼はタイの学生たちが民主化闘争のなかで作りだした「生きるための歌」と出会います。その歌は、苦しい農民の暮らしぶりを嘆き、戦いへの決意を告げるものでした。そして、彼はこの歌を範として、「水牛楽団」を組織して、社会変革を望む民衆運動に関わりながらアジアの抵抗歌を演奏したり、自ら創り出したりしていきました。

そして近年では、三絃や尺八をはじめとする、伝統楽器を使った多くの試みが為されています。彼は、「楽器と伝統をさかのぼり、ありえないかもしれないが、じっさいには存在しなかった音楽の別なありかた」をみつけることを志しています。その音楽は、「二〇世紀音楽の神経症的な速度や複雑な運動ではなく、繊細な音色の差異と拍節構造のような、外側からの規律ではない、身体感覚にもとづく時間(以上、高橋悠治『きっかけの音楽』みすず書房刊の“花筐——高田和子を悼み”より)」をもつものです。精神性を重視するヨーロッパ近代音楽とは異なり、音を発するために手を動かす、その時の内的な感覚やその身体性に眼が向けられています。

今回の『高橋悠治の肖像』公演では、1960年代から今日の作品まで、ヨーロッパの近代音楽を超え、新しい次元を目指した作品の数々が紹介されます。当日は高橋悠治自身が自らの創作や作品について語りながら演奏会が進められま

す。出演は高橋悠治に加え、漆原啓子（ヴァイオリン）、波多野睦美（メゾ・ソプラノ）、及川夕美（ピアノ）、笹久保 伸（ギター）、保田紀子（パイプ

オルガン）、志村禪保（尺八）という、高橋悠治が友情と信頼を寄せる演奏家たちが、豪華にも集結します。皆さまのご来場をお待ちしております。

最後に、いま一度、高橋悠治の言葉を紹介します。

《中村》

音は生まれず  
音は滅びない  
始まりも終わりもない音楽  
音楽を創ることはできない  
音楽は身の周りにあるもの  
隠れてあるなにものが顕す響の痕  
顕れた音は隠れた音がそれ自身に還る響

すべての音はいま過ぎ去った音  
音がきこえたとき  
いまはない  
ここはない  
いまここに立っているのはこの身体ではない  
この心ではない

どれほど長くいっしょにいても  
人は人を理解しない  
ひとりひとりの道が出会うことはない  
それなのに密やかな音楽がそこに行き交う  
人間であることのくらしみをくらしみとしながらも

くるしみがそのままそこからの解放でもあるような音楽  
その音楽はこの身体に覆われ密やかに息づいている  
なにものがこの身体を透して音楽している

郊外の小さな食堂の二階で  
生きるための歌をうたうタイの仲間たちと再会した  
人びとのために革命をめざしたが  
行くほどに道は遠くなるばかりと言いながらも  
20年前とおなじ楽器で  
歌に添って音をさぐりながらすすむ  
これは音楽の道  
かぼそくたよりなく  
これでいいのだろうかと思いつつすすむ  
これは思いやりの技術  
努力は得ることではなく手放すこと  
思想にも方法にも経験にもまどわされず  
この身体を透して音楽するなにものかを信頼して  
耐えて耐えて  
日々に世界に向かってひらかれてゆく

高橋悠治

（高橋悠治『音の静寂 静寂の音』平凡社刊より“音の静寂 静寂の音 1いまここに立つ”より抜粋）

## 最近の公演から

APRIL



1



2



3

1~2.高山三智子 ピアノ・リサイタル  
3.千波湖畔大スクリーン・コンサートの様子

### 高山三智子 ピアノ・リサイタル(4月26日)

水戸出身の高山三智子さんのピアノ・リサイタル。ベートーヴェンの〈テンペスト〉ソナタに始まり、リストの〈葬送〉、シューマンの〈楽しき農夫〉、モーツァルトの〈トルコ行進曲〉、メンデルスゾーンの〈春の歌〉など広く知られている名曲が贅沢にも一夜に集められた。また、高山さんがとりわけ大切にしているロシア作品からは、今回はプロコフィエフの『ロメオとジュリエット』による10の小品から数曲が披露された。高山さんがピアノ演奏にかける一途な想いというのは、本当に感動的である。その魂のこもった演奏が、聴衆の心を掴み、高揚させる。アンコールは「ショパン:幻想即興曲 嬰ハ短調 作品66」《中村》

アンケートから●とても素晴らしかったです。指の動きが速く、感動しました。世界中で評価されている有名なピアニストの高山さんが水戸市の出身だと知ったので、何だかうれしくなりました。(小美玉市:J.N.さん)

### 水戸室内管弦楽団第75回定期演奏会 (4月26、27、28日)

水戸芸術館開館20周年、水戸市市制施行120周年、水戸藩開藩400年、そしてメンデルスゾーン生誕200年を記念する公演として、小澤征爾音楽顧問の指揮により開催した第75回定期演奏会。プログラムはメンデルスゾーンの〈ピアノ協奏曲 第1番〉と劇音楽〈夏の夜の夢〉。ピアノ協奏曲の

独奏を務めたのは、まだ20代の若さながら国際的な地歩を固めている小菅優。その演奏は、彼女が日本人という枠を超えて、すでに世界でも指折りのピアニストであるということを感じさせる、スケールの大きな、感銘深いものであった。〈夏の夜の夢〉の語り手として登場したのは、小澤征爾の子息で俳優の小澤征悦。父と同様に演奏会では舞台上に台本（スコア）を置かず、身振りを交えながら、臨場感に溢れる語りが披露された。さらに、ソプラノの中嶋彰子、メゾ・ソプラノのキャサリン・ローラー、そして25名から成るコーラスの東京オペラシンガーズが、華麗な歌声で、この作品の劇的な展開に大きな役割を果たした。

演奏会に先立って4月26日のゲネプロ（通しリハーサル）が一般に公開された。また、28日はNHK水戸放送局の協力により茨城県域デジタル放送にてテレビの生中継が行われ、その映像を千波湖畔のふれあい公園に特設した大スクリーンに投影する「大スクリーン・コンサート」も実施した。小菅優が大スクリーン・コンサートが開かれている会場に駆け付け、終演後にショパンの〈別れの曲〉、〈黒鍵〉、〈革命〉、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ〈テンペスト〉の第1楽章など、全6曲を演奏した。さらに小澤征爾と小澤征悦も会場に駆け付け、集まっている聴衆の皆さんに向かって直接、感謝の言葉を贈った。

なお、3日間の演奏会の全ての冒頭にJ.S.バッハ（マーラー編曲）の〈エア（管弦楽組曲 第3番



1



2

ニ長調 BWV1068より)) (通称:G線上のアリア)の弦楽合奏版が演奏された。この作品は、記念すべき第1回定期演奏会のアンコールとして演奏された曲であり、20周年を記念して今回取り上げられた。また、4月27日は、小澤征爾とも親交の深かったロシア生まれの世界的なチェリストのロストロポーヴィチの命日(2006年没)で、この日の演奏は同氏に捧げられた。《中村》アンケートから●冒頭の〈アリア〉は嬉しい贈り物であった。ピアノ協奏曲ははじめて聴く曲だが、実演でしかも最高のお膳立てで聴けるというのは何と贅沢な体験であろう。天才の若き情熱の発

露を見事に表現した小菅さんのピアノも素晴らしい熱演でした。親子共演の〈夏の夜の夢〉は、まさに豪華キャストで(水戸芸術館の)20周年を祝う、また(メンデルスゾーン)の生誕年にふさわしい祝祭感と華やかさにあふれていてよかった。(水戸市:T.M.さん) ●(公演日の)27日は私達の結婚記念日です(6周年)。すばらしい思い出となりました!!最高のプレゼントをありがとうございました!!(川崎市:M.F.さん) ●とても楽しかったです。夢のようにワクワクする3日間でした!いつまでも終わって欲しくないような……。感動を本当にありがとうございました。(台東区H.N.さん)

1~2.水戸室内管弦楽団 第75回定期演奏会



新しいvivoの読者の方は、こんなコーナーがあったことすらご存知ないかもしれない。ネットワークする猫、タマとして登場した僕は、前身のコーナーである「ひとり言」の時代を含めれば、たぶん12年くらいvivoに出没してきた。僕の役割は、演奏会企画から話題を探し、その世界を広げて行くお手伝いをする。未完に終わった作品をリストアップしたり、ショスタコーヴィチについてコアに書いたり、その一方で、図書館の方にインタビューしたこともあった。要するに、演奏会を手掛かりにいろいろ「つながってゆく」ことが、担当Yから僕に課せられた使命だった。

しかし近年は、vivo紙面がますます情報豊富になってスペースがなくなってきたこと、また、担当Yが、高校生音楽講座、水戸市国際交流協会や公民館での講座、ラジオやテレビへの出演、さらにはブログを通じて自ら「つながる」ことを覚えたので、僕の出番は激減していたのだ。

さて、担当Yが別項の通りやめるので、その別人格、いや別猫格である(もうそう書いてもいいだろう)僕も、ここを去る。去るにあたり、担当Yが僕に託したことを、もう一度ふりかえってみる。それは、「音楽はまず感じるもの、しかし考えればより楽しく深い」ということだ。なぜバッハのカンター

タはあんなに心の奥深くまで降りて行くのだろう。ベートーヴェンの後期の弦楽四重奏曲は、僕らをどこに連れてゆくのか。ドビュッシーのピアノ曲から音の香りや色を感じるのはなぜか。無限の「なぜ」という問いかけが、その音楽を生んだ人と世界に向って放たれるからこそ、音楽はすばらしい。

別れの時が来た。何を最後に、皆さんと共に聴こうか。やはりここは、ふだんこのホールでは聴けない大編成だけれど、マーラー〈大地の歌〉という(あ、室内楽版もあるか…って、最後までネタ探し)。最終楽章、〈告別〉の歌詞は、こんなふうに閉じられる。「故郷にむかってさまよいゆこう。しかし決して、遠くにゆくわけではない。わたしの心は静まり、その時を待ちわびる。春になれば、愛する大地にはいたるところに愛らしい花が咲き、緑が新たに萌えるだろう。いたるところで、永遠に、遠い果てまで青々と輝くことだろう。永遠に、永遠に…」

## vivo編集長退任および退職のごあいさつ

いつも、水戸芸術館音楽部門の企画をお楽しみくださり、また『vivo』をご愛読下さり、ありがとうございます。

さて、私、矢澤孝樹は、この7月をもって水戸芸術館を退職し、それに伴って『vivo』の編集長としても本号をもって退任させていただくことになりました。退職の事情についてはすでに水戸芸術館ホームページ内スタッフブログ内「矢澤孝樹の制作日記」(URL:<http://www.arttowermito.jp/blog/yazawa>)中の「告別」の項(2009年3月19日の日記)に詳述させていただきましたが、郷里の山梨で家業を継ぐ予定だった弟が昨年不慮の事故で急逝し、長男である私が家業と家督を継ぐ必要が生じたのが、その理由です。

1991年4月から学芸員として水戸芸術館に勤務し、2001年4月から主任学芸員を、同年5月号(第70号)から『vivo』編集長を務めさせていただいてま

いました。18年半にわたる水戸芸術館での仕事は、常に能力と経験の不足の中で試行錯誤を繰り返し続ける日々でしたが、その中で、なんとか今に至るまで走り続けることができたのは、皆様のあたたかいご理解とご指導、ご支援のおかげです。心より、感謝申し上げる次第です。

数々の試行錯誤を、いまだ冷静に振り返ることは困難ですが、それでも、演奏会場で皆様感動に満ちて拍手を送られている姿、ステージで活躍される姿、館内や街の中でばったりお会いして演奏会の感想をお話して下さったことなど、無数の忘れがたい情景が次々と目に浮かびます。それだけに、20年近い年月をこの地で過ごし、家庭も築いた「水戸人」として、皆様と音楽を通じての出会いをますます深めていきたいと思っていた矢先にこの場所を去る決断を下さねばならないのは、まさに断腸の思いでした。

それでも、水戸という街で、皆様と音楽に出会い生きる喜びを感じることに感謝し、いけばくもりとも果たせたとのならば、望外の幸せです。

18年半の間に会ったすべての皆様に、そして水戸の街に、万感の思いと感謝の意を捧げつつ、私はこの地を去り、第二の人生を始めます。これからも水戸は、私の第二の故郷として心の中にずっと生き続けます。本当に、ありがとうございました。次号からは同僚が新たな『vivo』の、そして新たな水戸芸術館音楽部門の歴史を刻んでゆくはず。皆様のますますのご支援を心よりお願いし、ごあいさつの締めくくりとさせていただきます。

2009年5月15日

水戸芸術館音楽部門主任学芸員・vivo編集長  
矢澤孝樹

## information

### ■ チケットに関するお問い合わせ

…水戸芸術館チケット予約センター/029-231-8000  
営業時間/9:30～18:00(月曜休館)

### ■ 公演内容や企画に関するお問い合わせ

…水戸芸術館音楽部門/029-227-8118

### ■ 【ATM便り】毎月1回茨城新聞に不定期登場。

## 「水戸の街に響け! 300人の《第九》」コーラス参加募集

水戸芸術館では昨年に引き続き、「水戸の街に響け! 300人の《第九》」を開催するにあたり、一般公募によるコーラス参加者を募集いたします(未経験も可)。詳しくは、応募要項をご覧ください。

公演日時:2009年12月13日(日) 12:00開演・13:30開演(2回の公演)

応募受付期間:2009年6月30日(火)～7月26日(日)※当日必着

応募要項請求方法:

- ①水戸芸術館 エントランスホール・チケットカウンター(9:30～18:00/月曜休館)にて直接入手
- ②水戸芸術館ホームページよりダウンロード
- ③80円切手を貼付し返信先を記入した封筒を同封の上、下記宛郵送

お問い合わせ:水戸芸術館音楽部門《第九》係(担当:関根・中崎)

〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8

TEL 029-227-8118 FAX 029-227-8130

## チケット・インフォメーション

### 《6月27日(土)発売分》

#### ◎オペラシアター こんにゃく座 オペラ《変身》

9/15(火)18:30開演 料金(全席指定):A席¥3,000 B席¥2,000

会場:水戸芸術館ACM劇場

#### ◎水戸室内管弦楽団第77回定期演奏会

10/10(土)18:30開演、10/11(日)14:00開演

料金(全席指定):S席¥5,000 A席¥4,000 B席¥3,000

#### ◎〈ちょっとお昼にクラシックEXTRA2〉

オルガニストグループ『TRM』の“踊るオルガン”

10/26(月)13:30開演 料金(全席指定):¥1,200(ドリンク付)

会場:水戸芸術館エントランスホール

※この演奏会では、託児サービスをご利用いただけます(定員20名)。

※水戸室内管弦楽団第77回定期演奏会には、6月23日(火)より運営維持会員、6月24日(水)より友の会会員の先行電話予約がありますので、6月27日(土)の一般発売の時点で、券種によってはお客様のご希望に添えない場合があります。予めご了承ください。

### 《6月28日(日)発売分》

#### ◎Duo La Bilancia(長澤 順、清水美和) ピアノ・デュオ・リサイタル

9/6(日)15:00開演 料金(全席自由):一般¥2,500 学生(大学生以下)¥1,500

#### ◎岡部昌子 ピアノ・リサイタル

9/27(日)15:00開演 料金(全席自由):一般¥2,500 学生(大学生以下)¥1,500

## これからの演奏会・残席情報

○…残席あり(20席以上) △…残席わずか(20席未満) ×…残席なし  
中央…中央ブロック 左右・裏…左右ブロックおよびステージ裏 補助…補助席

◎水戸室内管弦楽団 第76回定期演奏会……7/4(土)中央×、左右・裏△  
7/5(日)中央△、左右・裏○

◎高橋悠治の肖像……………7/18(土)中央○、左右○

※5/24(日)現在の状況です。

※公演当日に残券がある場合、開演1時間前より水戸芸術館チケットカウンターでお得な学生券を発売いたします。ご購入の際には学生証(記名章)をお持ちください。公開セミナーなど、学生券のない公演もございますので、予めお問合せ下さい。

※固定席が売り切れ次第、補助席を販売いたします。

## 水戸芸術館の主な7・8月のスケジュール

### コンサートホールATM

■水戸芸術館開館20周年・水戸市市制施行120周年・水戸藩開藩400年記念事業  
水戸室内管弦楽団 第76回定期演奏会

7/4(土)18:30開演、7/5(日)14:00開演

料金(全席指定):S席¥8,000 A席¥6,500 B席¥5,000

### ■高橋悠治の肖像

7/18(土)18:00開演 料金(全席指定):一般¥3,000 学生¥1,000

### ■水戸市芸術祭

□市民音楽会 7/25(土)、7/26(日) 各日13:00開演 入場無料

□少年少女合唱隊 8/16(日)14:00開演 入場無料

□ジュニアオーケストラ演奏会 8/23(日)14:00開演 料金(全席自由):¥500  
※チケット発売日:6月25日(木)

□交響楽演奏会(茨城交響楽団) 8/30(日)14:00開演 料金(全席自由):¥1,500  
※チケット発売日:6月13日(土)

### エントランスホール

#### ■パイプオルガン ブロムナード・コンサート

7月:11日(土)、19日(日) 8月:1日(土)、2日(日)、15日(土)

開演時間:12:00/13:30(2回公演)

□夏休みスペシャル

8/22(土)12:00/13:30 オルガン:川越聡子 入場無料※演奏は各回20分程度です。

### ACM劇場

#### ■水戸市芸術祭

□謡と仕舞の会 7/5(日)10:00開演 入場無料

□バレエ・フェスティバル

7/12(日)14:00開演(瑞穂バレエ教室)、16:00開演(シオンバレエ)

料金(全席指定):各¥500 ※チケット発売日:6月12日(金)

□三曲各流演奏会 7/20(月・祝)13:00開演 入場無料

#### ■《子供のためのシェイクスピア》『マクベス』

7/28(火)19:00開演

料金(全席指定):[A席]大人¥3,500 子供(中学生以下)¥2,300

[B席]大人¥2,500 子供1,800円(中学生以下)

#### ■演劇フェスティバル

□茨城大学演劇研究会『クロノス』

8/14(金)19:00開演 料金(全席自由):一般¥1,000 大学生以下¥800

□劇団OH-NENS『ラン・フォー・ユア・ワイフ』

8/15(土)16:00開演 料金(全席自由):¥800

□劇団義公『水戸黄門 人情時代劇「そばの恩」』

8/16(日)14:00開演/17:00開演 料金(全席自由):¥1,800

□舞踊劇団「創」(うまれる)『「卑弥呼〜愛と悲しみのポレロ!」 運命のクロスワールド&元氣だ、祭りだ! 輪っしょい!』

8/21(金)18:00開演 料金(全席自由):¥2,000

□演劇事務所'99『煙が目にしみる』

8/22(土)19:00開演 料金(全席自由):一般¥1,500 高校生以下¥1,000

□水戸演劇フェスティバル プロデュース『ココロ』

8/23(日)14:00開演/17:00開演 料金(全席自由):前売¥1,800 当日¥2,000

### 現代美術センター

#### ■手で創る 森英恵と若いアーティストたち

7/11(土)～8/16(日) 9:30～18:00(入場は17:30まで)

休館日:月曜日 ただし、7月20日(月・祝)は開演、翌21日(火)は休館。

#### ■現代美術も楽勝よ。

8/29(土)～10/12(月・祝) 9:30～18:00(入場は17:30まで)

休館日:月曜日 料金:一般¥800 前売・団体(20名以上)¥600

中学生以下・65歳以上・障害者手帳をお持ちの方と付き添い1名は無料

## 茨城の主な7・8月の演奏会 ※有料公演のみ

#### ◆佐川文庫 TEL/029(309)5020

■若手ピアニストシリーズ ―若きピアニストたち―

竹田理琴乃 ピアノ・リサイタル 7/25(土)18:00開演

#### ◆茨城県民文化センター TEL/029(241)1166

■横山幸雄 ピアノ・リサイタル ～ベートーヴェン・ショパンの名曲を紡ぐ～  
7/5(日)14:00開演

■千住真理子とイタリアの名手たち 8/2(日)14:00開演

#### ◆水戸市民会館 TEL/029(224)7521

■あひるの合唱団 第48回定期演奏会 7/20(月・祝)14:00開演

#### ◆水戸市内のその他の会場

■水戸ゾリスTEN 木管四重奏のタペII 7/3(金)19:00開演

会場:カフェ・トロワ・シャンブル TEL/029(227)7487

※スペースの都合により、水戸市内の公演のみとさせていただきます。

水戸芸術館音楽紙『ヴィーヴォ』 2009年7月発行 第142号

編集・発行/水戸芸術館音楽部門 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8

TEL:029-227-8118 FAX:029-227-8130

e-mail[ankmr@arttowermito.or.jp] URL[http://www.arttowermito.or.jp/]

編集/水戸芸術館音楽部門(五十音順):佐川真美・関根哲也・高巢真樹・中崎美智代・中村 晃・矢澤孝樹(編集長)

DTP/村田延司[株式会社イセブ]

印刷所/株式会社あけぼの印刷社

次号は…

久々の室内オペラ公演。ACM劇場にて!